

---

# モテない男が手にした物

K.KAIL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モテない男が手にした物

### 【NZコード】

N9207D

### 【作者名】

K・KAIL

### 【あらすじ】

何をしてもダメな主人公・綱渡慶雅。そんな彼は今日も紹介してもらった女の子にフラれ、トボトボと家路についていた。いつもの公園で黄昏ていると・・・

## 1話・デブヒジャイフ

僕の名前は綱渡慶雅<sup>つなわたりよしまさ</sup>。ツナつて呼ばれています。

彼女いない歴は26年。今の年齢も26歳。つまり全く異性にモテた事がないんです。もともと僕は体重が100キロ近くあるし服なんか気にした事もないし、だらしないし……。

高校もダブつちゃつたので同学年のみんなはまだ25歳。そんな知り合いの中には僕からしたら素晴らしい男がいるんだ。

神谷練<sup>かみやれん</sup>。こいつはひやりましい……いや、許せない程女の子をはべらかし、彼女がいても2番や3番がいたりと言ったスーパー前列腺ボイなんです。

そんな僕は毎回、練から女の子を紹介されますが……もちろん、まくいかず今日も落ち込んで帰るところってわけ。

僕はいつも田代の世田谷公園のブランコに揺られながらコンビニで買ったチューハイを片手に空を見上げるんだ。

いつものとおりブランコに腰掛けようとするところには猫が先に座っていた。どかすのも悪いと思い隣のブランコに座ると……

「おーーーーのデブー、やけにシケたツラしてやがるなーーー！」

・・・周りを見渡しても僕以外誰もいない。

え  
・  
・  
・  
?  
?  
だ、  
だ  
れ  
?

「おまえの隣に座つてんだろ？！腹が邪魔で横も見えねえのかよつ！」

『横つて・・・・。え？？』

そこに座って僕を見ていたのはさっきの猫。

ええええええ！ 桜 猫が喰ふた

おこー・テブー・名前は?」「へへ、るせえなー! オレか喋ーーちや悪いのかよ! こじやねえか!

え・・・ツナだよ。き・・・君は?』

「オレにシャイフルでんた！ でよお」と云つた？ 浮かなし顔してよ

『そりやあ浮かないよ・・・実はかくかくしかじか・・・』

「かあ～～！～バッカだなあ、おめえは。よく考えてみろよ。オレから見たらその練つてヤツもオマエも同じ人間だろう？クヨクヨすんない！」

『でも僕は練みたいにカツコよくもないし・・・デブとかブタとか言われるし・・・。』

僕は思い出してどんどん頭をできてしまつたんだ。

「よしーじゃあオレがオマエの根性を叩き直してやるーそのかわり  
オレに毎日メシを食わせろ! いいなつ?」

ジャイブはブランコから飛び降りると僕の背中に乗つかった。

『ええええ・・・・・、困るよ・・・』

「お前働いてんだろ? オレみたいなノラ猫さえ飼えないのに女がモ  
ノにできんのか! ?」

『・・・・・』

こうして僕は返す言葉もなく喋るノラ猫のジャイブを連れて下宿先  
の新聞屋に帰ることになった。

このジャイブとの生活がモテない男日本代表クラスの僕を大きく変  
える事になるなんてこの時の僕は知る由もなかつたんだ。

## 1話・テフとジャイフ（後書き）

人間は中身が大事なんです。そんなことがテーマになっています。

## 2. 話・業とい練と由希れと（福井ゆい）

ひょんなことからノーリ猫のジャイアント生活を始めてしまつた、ツナ。そんなツナにやつやくともなく悲しい事件が舞い込んできた。・・・。

ジャイブとの生活が始まつて翌日の事だった。僕に恐ろしい訃報が訪れた。

はい。  
・  
・  
・  
もしもーし。

「ツ、ツナ君？ あたしあたし！ ユキだけど……」

えええ……女……H#れん?!と  
とじたの??"

驚いたよ。電話の主は津村由希さん。練からの紹介で昨日、三回目の飲み会をしたんだ。そして由希さんは結構、練の事が好きで・・・僕はまたフランクでしまったという・・思い出したくもない話だ。しかしどうしたんだろ?・すぐ慌ててこう。

『お、お、お、お落ち着いてー! どうしたの? 』

「おめーも落ちつけってんだい、このブタ！」

ジャイブが横で余計な事を言うが僕は無視した。

「練が・・・昨日の帰りあたしをかばつてトラックに撥ねられて・・・亡くなつたの・・・。」

え  
・  
・  
・  
・  
練  
が  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

信じられなかつた。

僕をいつもバカにしていたあの練が亡くなつたなんて信じられるはずもなかつた。

『わ、わかつた！僕も・・・お葬式に行くよ。』

お通夜まで時間がない。慌てて喪服を着て葬儀会場に向かう僕はジャイブに声をかけた。

『ジャイブ！君ほびうる？つこてくるのかい？』

「へつー。葬式なんて辛氣くせーとこ行きたかねえんだけどなー・・・

「

ジャイブはプライとそっぽを向いた。

『じゅあ家で待つててよ。ゴハン置いとくからー。』

僕が少し怒つて言つと

「あああーーー！待つた待つた、わかつたよ、行くつてばーおまえだけ外食しようつたつてそういうかねえぞー！」

全く・・・この猫は僕より食い意地が張つているなあ・・・。

『練は早くに両親を亡くしてゐるからお葬式もきつと寂しいだらうな・・・かわいそー・・・』

僕はそんなことを考えながら配達用カブに飛び乗つた。

うちから葬儀場まではほんの15分ほどだった。祭壇の前、練は棺の中である昼夜寝でもしているかのよつた顔で眠っていた。

『練・・・・。』

練は確かにイヤなヤツだったけど日雇いのバイトで僕がへマして監督にぶたれた時、練がその監督を思いつきり殴つてＫＯしちゃつて練までクビになっちゃつたこととかそんなこともあった。ただのイヤなヤツじゃなかつたよ。

「へへへっー悔しかつたら早くオレにあいついてみろよー・ココが違うんだよ、コ・コ・が！」

なーんてイヤミつたらじしく言つてたあの練。眠る本人を田の前にして初めて「死」を感じた。

気が付くと棺の周りには恐ろしく練の彼女などであつた5~6人の女の子が練を見つめてビービー泣いていた。

なんにせよ彼は僕なんかよりたくさんの人愛されていたんだ。だつて練はバンドでギターやってるしダンスうまいし顔はジャニーズ系だもん。そうだよねえ。

「全く・・・・もう見てらんねーぜ。おい・ブタ・さつと帰るぞ、いつまで泣いてんだー！」

ジャイブが背中に背負つたリュックから顔を出して僕の後頭部を引つ搔きながら小声でまくしてたてる。

『いってつ！ いっててつ！ なんだよお・・・ 友達が亡くなつたんだぞ  
お？！』

「バカッ！」 そんな時だからこそあの由希ちゃんなんかチャーンスジやねーか！ 顔はカワいいしイイカラダしてるし・・・むつふつふつふ・・」

まるでHロオヤジの如くにやけるジヤイブ。

・・・さいてーな工口猫・・・。

「つるせ～～～！さ～早く引き上げるぞつ！帰つてメシだつ！さんまのかば焼きが食いたいぞつ～～！」

『はいはい・・・・・わかつたよう・・・』

涙も拭わぬまま帰ろうとしたその時だつた。

「ツナ君！！」

振り返るとそこには・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「バカッ！落ちつけ！」

ジャイブの声なんかもう僕の耳には入らない。

「もうあたし……どうしたらいいか……練がいなかつたら……あたし……」

『 ゆ、ゆ、由希さん・・・。元気出そつ、僕も・・・ツラいけど・・・。  
・今日は・・・練の傍にしてあげて?ぼ、ぼ、僕も・・・朝刊の配  
達終わつたら明け方に行くから・・・。』

「うん・・・。待つてるね・・・。」

後ろ髪を引かれる思いで僕は葬儀場を後にし、カブに乗つたんだ。

ブロロロロロ・・・。

ボロのカブはホントに遅い・・・。規定速度の30キロ以上が出ないんだよ、僕のカブ。

「おいおい・・・あれでよかつたのか〜〜?」

ジャイブがサンマの骨を咥えながら僕に叫ぶ。

『 だつて・・・由希さんはあれだけ練が好きなんだもん・・・仕方  
ないよ・・・』

「かあ〜〜・・・おまえの根性のなさにはまともと感服するぜ〜  
〜!まつたぐ〜!」

ジャイブはまるで呆れていふようだ。

さあ・・・これから朝刊の配達です。僕だつて練が亡くなつてと  
も悲しい。でも僕がしつかりしなきゃ・・・。

### 3話・初めての描き下ろし漫 (前書き)

薺場に残してきた由希の「元に急ぐツナーはちよ めめめめめなトラブルもあるがジャイブの機転により救われる・・・。果たしてツナの運命は・・・? ?

## 3話・初めての葬式さんみ

大急ぎで朝刊配達を終わらせて部屋に戻った僕とジャイブ。早く斎場に行かなきゃ由希さんが待つてる。

「わあわあ急げ急げ～！由希ちゃんが待ってるんだろう～？？」

まるでお祭りの準備でもすこかのよつこジャイブがまくしたてる。

『わかつてるよ～・・・でも少しでもマシな格好してかなきゃ・・・また由希さんに引かれちゃうじゃないか～！』

「・・・」こんな時にめかしじとで行くのも変だと想つた・・・。

。

ジャイブのぼやきを無視して僕はパンツからシャツからズボンまで買つたばかりの新しいものに着替え、リュックの中にジャイブを入れてカブにまたがった。

時間はまだ朝5時。車も少ないし走りやすい時間だった。ほどなくして僕らは葬儀場に着いた。

練の棺の前でもたれかかるように眠っていた由希さんを見つけた。

お化粧も落ちてすっかり目も腫れています。よつほど泣いていたんだろつた。

「オマエ、気が利かないなあ～・・ほら、そこに膝かけ毛布が置いてあるじゃねえか！それをかけてやるんだよつ！」

リュックの中から顔を出したジャイブが僕にさつやへ渴を入れる。

『わ、わ、わ、わかつてゐよお・・・・』

僕は毛布を一枚取つてそつとかけてあげるんだけど・・・・

『き、き、き、き、緊張で・・・手・・・手が震える・・・・』

「バカバカつ！緊張すると」じゃねえだらつー オマホナ! で変なと  
に触つたりしたら文字通りブタ箱行きだぞつーー！」

ジャイブの言葉が僕をよつよつと緊張させる。

『だ、だ、だ、だつて・・・・』

田の前で躍る由希さんの吐息が指に当たるんです。僕はもつ緊張が  
ピークに・・・。その時でした。

「あやつー! ツナ君? ! あなた何してるわけ? ? !

僕の手はしつかりと由希さんの胸元にぶつかっていた・・・。由希さ  
んの表情はそれは恐ろしいものになつてたんだ・・・

「こんな時に・・・・変態つーー！」

・・・・・・ほらね・・・。もう練が亡くなつてもいいつ役回  
りは変わらないんだ。

絶望しかけたその時だった。

「ユちゃん」

「え？？」

リコックからジャイブが顔を出して事もあらつか由希さんに出でる  
のです。

「やだ……」のうつたらあ……超カワいい。慰めてくれるの?  
?優しいね。」

そしてジャイブが毛布に包まると由希さんがよつやく気付いてくれ  
たのです。

「もしかしてこの毛布……ツナ君が?」

『あ……いや……その……』

「なんだ……早く言つてくれればよかつたの……。『めんね。  
勘違いしちゃって……。ありがとう、ツナ君……』

由希さんの顔にちゅうとだけだけ笑顔が戻ったんだ。

『いや……いいんだよー。わざわざしないでー。』

ジャイブを見ると彼の手はいつまでもいた。

「これでもや~~~~~きな貧乏一つだか~むせせせせせ~~~~!」

ジャイブの効果もあってか少し由希さんが明るくなつた。告別式が

始まるまで僕らはいろんな話をしたんだ。

でもほんと僕らが練の話だったな。寂しいような仕方ないような…。あ、ジャイブの話はその次に多かったんだよ。でもさすがに人の言葉を喋る事は内緒にしたんだけどね。

「あたしもね、いろんな事情で両親と暮らしてなくてさ。ずっと一人で生きてきたの。誰にも頼らないで生きる自信があつたけど…。あたしやっぱ弱くてね、そんな時にいてくれたのが練だったんだ。あの人は人のためなら自分の犠牲を厭わない人だったから…。」

『僕も一度ね、バイトでミスした時に監督にすごい殴られたんだ。そんな時に練は僕を助けてくれて…。監督さんをボコボコにしてバイトをクビになっちゃつたりして…。熱いヤツだった…。僕には絶対マネできないもん。』

「これからはあたしもツナ君も練に頼らずに生きてかなきゃならないんだもん…。お互いファイトだよ！はい！練の前で約束つ！」

『う…うん…。』

「ゆ~びき~りげ~んまんう~そつ~いた~らハリセンボンの~ますつ~ゆびき~つ~た~…~!」

指きりが終わったその時、由希さんはまた涙を流し始めた。やっぱり…練は彼女の中で大きすぎる存在だったんだよね。

「貸し2つだかんな…。」

ジャイブが僕の後ろでさつ氣無くぼやく。

そういうのが早いかジャイブは涙を流す由希さんに甘えかかった。

「あや・・・やだ・・・くすぐつたいつてば・・・あははは！」

由希さんはそんなジャイブのおかげでまた笑顔になつてたんだ。それを見てちょっと複雑だったけど僕はジャイブに感謝した。

由希さんが笑顔なら・・・それでいいか・・・つて思つたから。

そ

## 4話・僕、人生最大のピンチです。（前書き）

集金も順調。平凡な生活を繰り返すツナにまたしても好機！憧れの由希が自分の部屋に遊びに来ることに・・・。そんな由希を迎えて行くと女の悲鳴が・・・いつたい何が起こった？！

## 4話・僕、人生最大のピンチです。

練の告別式も無事終わって僕はまたいつも新聞配達に従事する生活に戻ったのです。

そして月末近くなるこの日、僕らにとって最も憂鬱な集金業務が始まることです。

『よしー今日で残照（残り領収書枚数）を半分くらいにするぞー』  
「じゃあ、2丁目の吉田さんとこからだーあそこは集金の時にハムをくれるらしいぜー」

『モーゆーとこばかり覚えてるんだなージャイブはー・・・』

配達力ブに乗つて数時間。僕は今日は頑張ったんだよ。100枚近くあつた残照を残り10枚まで減らしたんだ。90件集金したんだよ。

さあ、今日は帰つて大好物のハンバーグ弁当ライス大盛り+ライス単品大盛りを食べよう・・・なんて考えていた時だった。

僕の住む部屋は新聞屋の2階。だから部屋に戻る時は1階のお店の前を必ず通るんだ。いつも通りにお店を通ると店長に呼び止められたんだ。

「おうー！ブーちゃん！ちょいと、知つてつか？」

新聞屋の店長が声をかけてきた。

『あ・・店長。 どうしたんですか?』

「最近」のあたりに強盗が潜伏してるとかって噂が立つてゐるんだよ、  
警察からもポスターもひいてよお、この顔見たらすぐ通報……  
つてな! まあもうとつとくに海外かどつかに高跳びしちまつてゐるだろ  
うナビなー!」

恐ろしい話だ。まあ僕の部屋に盗ぬものなんてないんだからナビ。

『恐いですねー・・・僕なんかすぐ刺されちゃいますよー・・・』

「おめえはそんだけ分厚い肉があつやちょっととやそつと刺されても  
大丈夫だよ!」

ジャイブの悪態がまた始まつた・・・まあいいや・・とにかくお  
腹がすいたのでゴハンの準備だ。

『今日はゴハンがおいしいなあ・・・仕事頑張つた後のゴハンは  
最高だー!』

そんなときだつた。

ペロッロロペロロロ・・・

「おー! ブタ! 電話鳴つてゐるやー!」

『はーい、もしも・・・・・ゆ、由希ちゃん?』

口に含んだゴハンの粒が全部吐き出てしまつたんだ。

「うわわ・・・きつたねえ〜〜!」Jのブタ〜!吐くなよっ!」

突然の事でジャイブも避けられなかつたようだつた。

「ツナくん? 終電迷っちゃつてさあ~・・品川にいるんだけど  
ツナくんち近かつたよねえ? 朝までお邪魔していいかしらあ~? あ~?  
?」

いつもの由希さんと明らかに口調が違つた。これは・・・まさか・・・しかもかなり酔つているようだつた。

ゆ、ゆ、ゆ、曲希さんが部屋につつ？！ほほほ僕の部屋につつ？！

ます。』

「不祥事起こした後の校長か、おまえは・・・。」

ジャイブがまたしてもハードにツッコミを入れた。

しかし嬉しいのもつかの間・・・」の汚い部屋に由希さんをあがらせるわけにはいかない。

そして30分後、品川駅で由希さんを待つ、僕とジャイブ。

「妄想はやめとけ。・・・おまえの場合、あとで凹むから。」

そんなやり取りをジャイブとしていたそんな時だつた。

「HUR~...」

ひ、ひ、ひ、悲鳴だ……しかも女人の人……。

## ジャイフが表情を変えた

なにかあつたんだ?!!よし!!」てみると、ツカ!!

半はシャイフについていく形で悲鳴のする方向へ僕は駆け出した。

。そして見ると女人が妙な男に背交い絞めにされ首には包丁が・・・

その女の人は間違えようもない・・・・由希さんだつた・・・

駆け付けた一人の警官は血を流してうずくまっていた。すごい血が出てたからきっと刺されたんじゃないだろうか……。

周りの人は蜘蛛の子を散らすように逃げていく。僕だけが取り残された。

「ツナ君！助けて！！」

由希さんを羽交い絞めにしてこの町には見覚えがあった。

『ああああ・・・』こつはあの強盗・・・。』

『わ、わ、わ店長に見せてもらつたポスターの強盗だ。足が・・・震える・・・恐い・・・死ぬほど恐い・・・。』

「ツナ・・・刺される覚悟出来たか・・・?」

いつもチャラけているジャイブが真剣をひに詰つ。

『そ・・・そ・・・そんなわけないだろ・・・。』

当然だ・・・刺される覚悟なんてわざつ出来ないよ。

「えじやあ由希ちゃん見殺すんか?」

ジャイブが僕を睨みつける。

『そんな・・・・・』

そんな相談をしてる間に強盗は由希さんをしつかりと縛めながら一步一歩近づいてくる。

「くわい・えいじかんか」コラー。』

強盗はもつ僕のすぐ近くにまで迫ってきてこる。

『ひつ・・・・』

僕はその殺氣に押されて後ずさった。

「！」とな時、練だつたらどうするか細ひつへ。」

ジャイブの冷静な言葉に僕はほつとした。せつだ、コレで決まりへたら由希さんはどうなつちやうさんだー

僕はその刹那、覚悟を決めた。

『うわああああああああーーーーーーーー』

僕は無我夢中で包丁を握りしめた強盗に体当たりした。

## 5話・入院と自白（前書き）

強盗から僕をかばって刺されたジャイブ。そしてついにジャイブの秘密が由希にバレてしまう。

## 5話・入院と自白

強盗に向かつて行く僕。まるで全てがスローモーションのようだつた。

『ああ・・・マンガや映画なんかでよく言つスローモーションってこんなカンジなんだ・・・』

僕はこんな非常事態にそんな事を考えていた。僕と強盗の身体がぶつかるその刹那に僕が見たのは強盗の手に握られた包丁の切つ先。気づかぬうちにその鋭利な刃物の先端は真つ直ぐに僕のお腹の方に向いていた。

「バカっ！そんな正面からぶつかつたら・・・・！・・・・！」  
ジャイブが叫んだのがかすかに聞こえた。

僕と強盗がぶつかつた。100キロある僕の身体にぶつかられてバランスを崩す強盗・・・そして僕のお腹に突き立つた包丁。

「きやあああああああ！」

この悲鳴は由希さんだ・・・

ああ・・・僕はついに死んじゃうのか・・・。

そう考えた時だつた。

『あれ・・・痛く・・・ない？』

そしてその包丁の突き立つたお腹を見つめるとそこには・・・。

『ジャ・・・・・・ジャイブツウツ――――――――――――』

僕をかばってくれたんだ・・・。包丁はジャイブの前足の付け根あたりに深々と刺さっていた。

駆け付けた応援の警官に強盗は取り押さえられた。でも・・・でも  
ジャイブが・・・。

『救急車・・・お願いです・・・！ジャイブを・・・ジャイブを助けて！』

う。僕は警察の人たちに駆け寄り叫んだ。ジャイブは息も絶え絶えに言

「バカ…………」んぐらいで死ぬかよ…………。は・・早く由希ちゃんどこ…………。」

『いたな時」にまで・・・何言つてゐんだよー早く病院」・・・・・』

「いやなん……シバツナとれまわるかハ一の……」

解放された由希さんが駆け寄ってきた。

「ツナ君大丈・・・? きやつ! ジャイブ? ! まさかさつきの強盗に・・・」

『由希さん・・・』Jで少しだけ待つてて・・・。ジャイブを病院に・・

。』

「気を付けて・・・。あたしはまだ警察の人とお話しなきゃいけないだろ？から・・・」』にいるね。」

僕はカブを飛ばした。うちの新聞屋の3件隣りにあった獣医さんのおうちに向かつたんだ。

『ジャイブ・・・死んじゃだめだ・・・絶対だめだ・・・』

「へつ・・・だ〜・・・が死ぬかい・・・バカ・・・言つてんじゃねえよ・・・」

そういうじてる間に獣医さんの家に着いた。

『お願いします！包丁で刺されたんです・・・。この猫を・・・ジャイブを助けて下さい・・・』

ジャイブは3日ほど獣医さんの所で入院することになった。幸いにも刺された場所は急所を外れていて命にも別状はないし前足の切断とかそんな事もないって言つてくれたんだ。

「オレはいいから・・・早く行けよ・・・また・・・フラれちまうぞ・・・」

ジャイブはさつきとは打つてかわつてまたいつもの悪態をつく。

『全く・・・そんなに僕がいたらジャマなの〜？わかつたよ〜・・・』

人がこんなに心配してるのにジャイブのやつったら由希さんの事ばかりなんだもんな。助けてもらつておきながらこんな風に腹立てるのもおかしいけれども……。

僕は獣医さんにジャイブの事をよくお願いして駅前の由希さんの待つ場所に戻つた。

ちょうど由希さんも事情聴取が終わる頃だつたようだタイミングはよかつたみたい。

『由希さんーおまたせー!』

「ジャイブは……大丈夫なの?」

由希さんが心配そうな顔をしながら僕に訊ねた。

『獣医さんのところに3日くらい入院することになつたんだ。命にも前足にも別状はないみたいで……本当によかつたよ……。』

「そつ・・・よかつた・・・。それより・・・わつきジャイブが喋つたような・・・。戻れつて・・・。氣のせいだつたのかな?」

そうだ・・・わつき僕が強盗に飛びかかつた時に・・・

『えええ・・・ま、ま、ま、まさか・・・だ、だ、だつてジャイブは猫だよ?・?ね、猫が喋るわけないよー!』

僕は慌ててフォローしたけど由希さんはもはや確信があつたようだつた。

「ツナ君……何か隠してないでしょ？」「

由希さんの田がキラリと光る。

『か、か、隠してなんか……』

『本当によ？』

『二つと詰め寄る由希さん。

『いや……その……』

一步下がりながらじどりもどりになる僕。

由希さんは尚も

『隠してるなら教えて？ね？？？』

その気迫に僕はついに隠し通せなかつた。ああ……

『ごめん……寒は……かくかくしかじか……』

僕はあの田にブランコでジャイブと出合つた話を洗いつらせて全部喋つてしまつたんだ。

沈黙……。世が全て飲み込まれたかのような僕と由希さんのこの沈黙……。

こんなことマジメに話したら普通の人だつたら僕を狂人呼ばわりするだろ？。そりゃそうだ、喋る猫なんて……。

「そんな事が・・・」

僕のアリンコよりも小さな根性を振り絞ったタックルは・・・もはや喋る猫によつて震んで・・・否一もはや忘れ去られてしまつたようです・・・。

「・・・あのね、今日はあたしの事助けてくれてありがとう。ツナ君、あの時はなかなかカツコよかつた。」

え？僕の決死の自白は流された？！でも・・・よ・・・よかつたあ・・・。僕・・・もう死んでもいいかも。

そして由希さんは僕の部屋に来る事になつたんだ。ジャイブもいなこの一人きりの空間・・・あああ・・・緊張してきちゃつた・・・。

## 6話・由希セミナーミューム（前書き）

つこりシナの部屋にひまつててきた由希。強盗事件のせいでロマンティックな雰囲気じゃないが由希と一緒にいる話をする。・・・。

沈黙・・・・・・ 分かつ きよつもす』い沈黙・・・。

ついに由希さんが僕の部屋に来た。缶ジューを一人で飲んでいるところなんだ。

「ねえ、ツナ君？」

『は、は、は・・はいっつー。』

『せつしきの話なんだけど・・・ジャイブが喋る猫だつて話・・・。』

『びつやうせつしきの決死の由由せつやんと強いていたようだつた。』

『あ・・・ああジャイブは・・・不思議な猫なんだ・・・。』

「私も話してみたいなあ・・・。」

『た、た、退院したら僕からジャイブに会つてみるよ。あいつも由希さんの事ばかり心配してて・・・あははは・・・。』

そんな会話が続いていた。終電も終わつて今は夜中の2時を過ぎようとしている。偶然か、僕は今日は配達が休みの日だつたんだ。

「あたしね、練がいなくなつてすごく死にたい気持ちだつたけど・・・ツナ君やジャイブが居てくれたおかげかな?少しずつ元気になつてきてるみたいなの。このまま凹んでもちやダメなんだ、きっとそんな風に練が言ってくれてるのかなとかそんな風に考えながら自分を励

まして・・・。』

『僕は・・・練の事どっちかって言えればキレイだったんだ。僕にない物をたくさん持つてたから嫉妬してただけかもしねぇけど・・・。本当は練がうらやましかったのかも・・・。』

なんでだろう・・・。今までまともに話せなかつた僕が・・・思つた事がすつと言葉になつて喋れるようになつた感じがしたんだ。

『それに・・・なんだか練がまだ僕たちの近くにいるようなカンジがして・・・。』

由希さんははつとした表情を一瞬した・・・のは氣のせいだつたんだろうか??

「ツナ君は真つ直ぐなんだね・・・。あたしも練がまだ近くにいる気がしてゐる。あの人、とてもお節介焼きだつたもんね。あ・・・ツナ君、ひとつお願いがあるんだけど・・・。」

『お・・・お願い・・・?/?』

お願いって・・・なんだろう・・・。僕の心臓は高鳴るばかり。

「あさつてジャイブの退院でしょ?その時に・・・またお邪魔してもいいかな?」

『ももも・・・むむむんーこんな汚い部屋でよかつたら・・・』

また由希さんが来てくれる・・・。僕は天にも昇る気分だつた。だんだん由希さんとの距離も近づいてる・・・。もしかしたら・・・

もしかしたら・・・。

そんなこんなで気付くともう朝の5時を回っていた。

「あ・・もうこんな時間・・。じゃああたしはそろそろ・・。今日はいひいろいろありがとう、ツナ君。」

由希さんは眩しそうに笑顔を残して帰つていった。

それからその日を寝て過げした僕。そしてまた仕事・・・。

そして一日後。ついにジャイブの退院の日がやってきたんだ。

## 7話・ジャイブ復活パーティ（前書き）

ジャイブが戻つてくる日。ツナも由希も望んでいたこの日だつた。ジャイブを迎えて行つたツナはジャイブに秘密がバレてしまつたことを話す。そしてジャイブは・・・

## 7話・ジャイブ復活パーティ

そしてジャイブが帰つてくる日がやつてきた。まだ数日しか経つていないのにこんなにジャイブのいない日がつまらないなんて・・・。僕自身、まだ会つて間もない生意気に喋る猫のジャイブに対してとても強い友情を感じてるんだ。

朝10時。今日は第2週の月曜日だから朝刊はお休み。僕は睡眠をしつかりとつて獣医さんの元を訪ねた。

「やあ、いらっしゃい。ジャイブも君をずいぶん待ちわびていたようだよ。」

獣医さんに抱きかかえられてジャイブは現れた。右前足の付け根にはしつかりと包帯が巻かれていた。

「もう退院しても大丈夫だけどジャイブはまだ自分の力では歩いたり出来ないからね。しばらくは家でも安静にさせてあげて。それからまだ出血があるようだつたらうちに来て定期的にガーゼを変えなきゃダメだからね。」

『はい！ ありがとうございます！』

僕はジャイブを受け取つていつもの通りリュックに入れた。あ、もちろん足のケガに気を付けてそっとね。

由希さんは11時にうちに来るんだ。で、今は10時30分。そうだ、お菓子でも買いに行こうとスーパーへ向かった。

「おい・・・その・・・悪かつたな・・・」

リュックの中からジャイブが言った。

『えつ？何がだい？』

「いや・・・オレが刺されたばかりに・・・高かつたろう？金・・・」

『ジャイブが僕を守ってくれなかつたら僕はどうなつてたかわから  
ないよ・・・。それにそんな事は言いつこなしそー友達だろ？僕  
らはー』

「・・・すまねえ・・・」

今日はやけに素直だなあ、ジャイブのヤツ。「当然だ！」とか言つ  
と思つたのに・・・。

スーパーで買い物を済ませた僕。ちよつといつこ時間に部屋に戻つて  
これた。

『あ、そうだ・・・僕もジャイブに一つ謝らなきゃいけないことが・  
・・』

「ん？？」

『実は・・・ジャイブの事、由希さんごバレちゃつて・・・。』

「・・・せつぱりか・・・。あん時喋つちまつたからな・・・。じゅあ

今日から由希さんとも普通に話すのが…。」

てつきり怒られると思ったの…。やつぱつ今日のジャイブは  
変に優しかった。

「…」

由希さんが来た！

『…うひりしゃー、由希さん…』

「あやー…ジャイブー！もう大丈夫なの…？」

え…。僕思いつきしスルーされた？！

「あ…。あの…。ビ、ビ、ビ、ビ…」

「ほ…。本当に騒るのね…。よひへお、ジャイブ

「あ…。ああ…。」

僕は完全に置いていかれてる…。しかしこのジャイブの様子はなんなんだろう…。

お菓子を食べて話も盛り上がりつたところで時計を見るともう2時。夕刊の配達の時間だ。もう…。どうせなら夕刊も休みにしちゃえぱいいの…。仕方なく準備をして由希さんと話をかける。

『じゃあ僕、夕刊の配達に行つてくれるね。』

「じゃあ、今日はあたし」飯作って待つてあげるっ！」

「…………由希さんの手料理…………」「これは夢じゃないだろ？」「…………？」

僕は胸に期待を100キロ以上膨らませてカブに乗った。

夕刊をいつも以上のスピードで終わらせて部屋に戻るとなんだかとてもいい匂い……。

「おう！帰ったか！今日は由希ちゃん特製のポークカレーだ！共食いだな、おまえ。がつはつはつはー！」

わっせとは打って変わってジャイブの悪態も絶好調だ。

「意外に早かったね～。待つててね～もつじしたら出来るからね！」

「今日はオレもカレーライスが食えるんだな～！ちょい冷ましたヤツをネコ盛りで頼むぜ、由希ちゃん！」

「はいはい……そんなに慌てなーのっ！」

ジャイブも待ちきれない様子だ。僕のお腹もすくべ鳴っている……。ハズカシイけど……。

「はい、おまちどつをまー・ンナ君すいへべ食べるでしょ？たっくさん作つたからいっぺん食べてね！」

「こつただつきまーす！」

僕らは大きな声で言った。

そして30分後・・・

「いや～～～！ つんまかつたあ～～～！ ツナとじるとサバ缶しか  
食えないからなあ・・。 腹に染みわたる「うまさだつたゼー。」 ちそつ  
ちそつ、由希ちやん！」

『ほんと！ おいしかったよー！ 由希さんみたいな人なお嫁さんならきっと旦那さんになる人は幸せだろうなあ・・・。』

「ふふふつ・・・ありがとう、一人とも」

僕、なんか最近幸せな事がたくさんだなあつて思う。不謹慎かもしないけど練が亡くなつた日にジャイブと出会つて・・・ひつじ由希さんと仲良くなつて・・・。

まるで練が死ぬ時に僕に幸運をくれたような・・・。でもそんなわけないよね、練はこんな僕の事をしつかりと友達なんて思つててくれてないよ。「いたらただ面白いヤツ」ってだけだつたんだろうな。こんな事考えるなんて不謹慎だぞ、僕・・・。

由希さんが僕に言った。

「ねえ、ツナ君。今度よかつたらせ……こないだ助けてくれたお礼つて言うのもなんなんだけど……ファンタジーランドでも一緒に行かない……？？無料券を知り合いからもらつたから……？」

ファンタジーランゲットいりの舞浜駅から少し歩いたところにある

る老舗の遊園地だ。

『・・・・・ファンタジーランド、僕と?、?、?、?のお?・?』

「うそ・・・もしシナ君がよかつたらでいいんだナビ・・・・・・

『ば・・・ばひ・・・・』

「ひやー・もつ田の前でこりやけつかないでくれよなあ~・

ジャイブがそっぽ向きながらそんな事を言つ。

「」おひつ・ジャイブつ・茶化さないのつ・

「はいはい・・・ねとなしくしますよ~・」

そんなこんなで来月の19日・・・ひと月後に僕はついに女の子・  
・しかもあの高根の花だった由希さんとファンタジーランドに行く  
ことになったのです・・・・・。

## 8話・コーディネーター（前書き）

由希とデートの約束を取り付けたツナは今天にも昇る勢いだつた。そしてそのデートの時に着ていく服を買いに行くため、友人のイケメン・祐に電話をする。そして買物に向かうのだが・・・

『新聞配達はもちろん強引に休みにしたし……。あとは……身だしなみだなー。』

由希さんと会う時はもちろん気合を入れて穿き慣れないジーンズなんか穿いたりして少しでもオシャレに気を使っていたが……。

普段ともなると僕の格好は戸田競艇場で買ったオレンジのTシャツで後ろに「沫」と書かれているやつ。ダボダボのとび職の人が穿いてるようなチノパン、カカトを踏みつぶした運動靴……と言ったカンジ。どんな女の子でも一緒に歩きたくない服装だらうなあ……。

「これを機におまえ服でも買いに行つたらいどうだ? 今ある服はもう捨てちまえよー!」

ジャイブはあくびをしながら言つ。

そうだ、あれから3週間も経つたからジャイブの包帯はもうとれていて傷口もだいぶよくなつたんだよ。もう歩けるくらいまで回復したんだ。

『でも僕、センスないもん……。誰かコーディネートしてくれるないと……』

「友達でいるだらう? まあコーディネートしてくれたやつねー。』

『そんなセンスのこにやついるわけ……あつー。』

そう、いたのだ。そいつの名前は服部祐<sup>はつとつたすけ</sup>。練に負けず劣らずのモテモテだったんだけど気取らない気さくなヤツで・・・。今はバイトしながら美容師を目指して専門学校に通ってるんだ。

早速、僕は祐に電話をしてみることにした。

『もしもしし〜！祐？？僕だよ、ツナだよ〜！』

「おおお〜！ツナあ〜！ひ〜さし〜ぶりい〜じしたの〜？」

『実は・・・かくかくしかじかで・・・』

「ん？わかった、いいよ〜〜！じゃあ明日世田谷のユニークロでねえ  
〜！」

うまく約束を取り付けた。祐のセンスにかければ僕も少しは見れる  
カンジになるにちがいない！

翌日・・・。夕刊の配達も終わって6時頃。ユニークロの前で待つ僕。  
ジャイブはまたまたリュックの中にいるんだけどね。

「おお〜！ツナ待ったか〜？？」

ゆつたりとした口調のその声は間違いなく祐だった。顔はまるでS  
OPHIAのボーカルみたいな端正な顔立ちでそして足が長い・・・  
。見れば見るほど落ち込んでしまう。なぜ僕だけこんなふうに・・・  
。

そしてユニークロで買い物を始めた僕と祐。

「ツナさあ・・・これとか似合つんじやね? あ、んでズボンはこんなカンジですか~!」

僕は頷くだけみたいなカンジ。そしてファイツティングルームに行こうとしたその時だった。

「あれ？ ツナ君？ ？ ？」

『あ・・・ゆゆゆ由希さん?!

「ツナ君も買い物？ 奇遇だねえ！」

「ああ……曲괭이로 빙수를 만드는거야? ?」

「……の真裏に住んでるの！あら？ それぢやね？」

由希さんは祐に気が付く

あ……とおれりせおれ! ハナの友達の社で! す! 三口ジタタ! 」

長い

「こやこやこやー・・・んな」となこつすよおー由緒れどいわこ  
MCAMのモードれんみたこづれんー!」

し・・・しまつた・・・。このパターンはマズイ・・・。祐も今は彼

女いないし由希さんはこんなに美人……。

最悪の構想が頭に浮かびつつ焦る僕。

「じゃあ、友達待たせてるから行くね。またねツナ君、祐さん！」

『うん……また……』

そして買物は続く。祐はさつきから由希さんの話ばかりだ。

「あの子カワイイよねえ……ツナ、狙ってるの?」

『うん……今日の買い物も来週、由希さんとディズニーランド行くからそのための買い物だつたんだよ……』

「まあじかっ！まあほどほどに頑張れよ！オレたるや帰らなきや  
まあ……じゃあねえ！」

そんな事を話しながら僕はユニークロで約4万円くらいの買い物をし、祐は帰つていった。

「やれやれ……厄介なヤツのハチ合わせになつまつたなあオイ・

・

帰り道の途中、ジャイブがぼやく。

『え？ どういう意味や？』

「おまえわかんねえのか？ あいつ……祐は確實に由希ひやん狙い  
にモードが決まってるのがよー！」

『えへーまさか！祐に限つてそんな人の好きな人をとつたりなんか・  
・』

「恋愛なんてのはしょせん弱肉強食だろ？由希ちゃんが祐に惚れた  
らおまえどうすんよ？？」

『それは・・・まあ・・・』

「あいつは練よりもやり手かもしんねえべ？おまえ大ピンチだろ！』

言われてみればそうだつた。祐は練と同等に女性に不自由しない人  
種だつたんだ。確かに前に練から聞いたこともあつた。

『あああ・・・なんか先が思いやられるなあ・・・』

今日この日の祐と由希さんのばつたりの出会いが後の運命に大きな  
打撃を『える事を僕はまだこの時知るよしもなかつたんだ。

## 9話・夢の国と危険の始まり（前書き）

ついに「デートの日を迎えた。舞浜駅に15分前に到着し、由希とのデートを想像し、悶々とするツナ。そしてそこへきたのは・・・

## 9話・夢の国と危険の始まり

そして来た・・・運命の口。

服はバツチリ。ガラにもなくSAMUROIとかいう香水までつけて準備万端だ。今日はさすがに配達用のバイクは置いといで・・・と。

遊園地にはジャイブは入れないので今日は留守番をお願いしてきたんだ。東京駅から京葉線に揺られる事20分。舞浜に着いた。時間は待ち合わせの15分前。

『あああ～・・・緊張するよ～・・・なんてつたつて初のデートだもんなんあ・・・』

緊張と盲想は膨らむばかり。そんなこんなで待ち合わせの5分前になった瞬間だつた。

「お待ちどおさまつツナクン！」

ああっ・・・！」の声は由希さんだ！

白いワンピースの上に可愛らしく上着を羽織っている天使がそこにはいた。しかし・・・

「ヤツホ～～ツナ～～！」

・・・・・・その横にいたのは祐だった。

『ええっ！・・・・祐？！なんでここに？？』

僕は驚きをまったく隠せなかつた。

「いや～・・偶然だけじさあ～・・今日オレもこっちに来る予定があつて・・いや～偶然偶然！はつはつは～！」

祐は勝ち誇つたような高笑いをする。

「さつき京葉線で会ったの。だからせつかくだし3人で楽しみましょつて事になつたのよ。」

由希さんがご丁寧に解説をしてくれた。ああ・・・なんで僕の場合になるんだろう・・・。

由希さんも由希さんだよ・・・一人でファンタジーに来る予定なんか普通作らないだろう・・・祐の見え見えのウソがわかんないんだもんない・・・いや・・・もしかしたら由希さんはもう既に祐と・・・?  
頭の中で嫌な想像がどんどん膨らんでいく僕。それをよそに仲良く歩く祐と由希さん。

僕はそう気合を入れて一人の後を追つた。

「 もう そろそろ どう からこなつかあ～～？」

祐はガイドマップを覗きながら言つ。

「あたし、クマさんの見た夢》がいいなあ～！」

『うわあ～・・・乗り物こんなにたくさんあつたっけえ？どれがいいかなあ・・・』

僕は小さい頃に家族で来て以来、ファンタジーランドには来ていないかつたんだ。だからこそすつごく気合が入っていたんだけど・・・。

「スプラッシュ・フォール！これファンタジーランドの定番っしょお～！これ確かに落ちる時写真撮つてもらえるんだよねえ～！」

祐の目がキラキラと輝く。

「え～！あたし落ちるの恐いよお～・・・」

「大丈夫だつて～！手しつかり握つてるからさあ～！」

『・・・・・』

ス・・・スプラッシュ・ユ・・・。それを聞いた時僕は思わず黙り込んでしまった。そう、僕は絶叫系なるものが一切苦手なのだ。あの無重力感が・・・恐い。しかしここでビビつたらもう祐とすさまじく差をつけられてしまう・・・。僕は意を決した。

そして乗ったスプラッシュ・フォール。うう・・・まだあの落ちる所じゃないのに恐い・・・。

いきなりガタツつて傾いたと思ったら落ちるんだよね。そんなのが二回も続いて僕は失神寸前だった。

『あああ・・・・・もうダメだあ・・・・』

カタカタカタ・・・と鳴るコンベアの音。

さすがの由希さんも声がうわずっている。僕も2回の落ち所で頭はぼーっとしていた。

だいじよふだいじよふ！」

なぜ祐はこんな平気そうな顔を・・・なんて思つた瞬間だつた。

ふと仮がつべビードの上にいた。

『あわわわ・・・僕はいつたい？！』

あわてて起き上るとそこには救護員さん。

「スプラッシュユフォールでビックリして気絶されたんですって？」  
氣をつけなきやだめですよー！無理して乗つたら危ないんですから

「…」

僕はどうやら落トのショックで氣を失つたみたいだつた。我ながら情けない…。

『由希さんと祐は…？？』

・・・・いない…。僕が氣絶してゐる間に一人は遊んでゐるというのかつ？！

僕は慌てて救護室を出た。すかさず由希さんに電話する。しかし出ない…。嫌な予想が頭をぐるぐるする。早く一人を見つけなれば！－！時間はお昼12：25…

この時間ならどつかでお昼を食べてるに違ひない！僕は片つ端からファンタジーランド内のレストランを探した。その途中だつた。

「おお…・・・ツナじやん！」

祐がいた。よかつた・・・・。間に合つた・・・。

『祐…・・・あれ？由希さんは？？』

「なんかさ、親から急に電話が入つたとかで…・・・慌てて帰つちゃつたんだよねえ～」

由希さんは確か親とは住んでないはず…・・・でもそれを祐に知られるのもなんだか怖かつたから僕は敢て知らないふりをしたんだ。

『えええ～・・・なんかあつたのかなあ・・・・』

「まあ・・・仕方無いっしょお～・・・オレたまひも帰らひば、早いけど・・・。」

なんでだらう・・・。由希さん何があつたんだらうか・・・。

帰りの電車の中、由希さんの話を祐としていた。

「ツナ～・・・由希さんオレに譲つてくれねえかな～？」

祐がとてつもない事を言い出した。

『な、な、何を言つんだよ～！ダメに決まつてるじやないか～！』

『当然だ。譲るわけないでしょ～！～！』

『オレもマジになつちやつてんだよ～、これでツナとの仲がこじれたりするのも嫌だしああ。』

『僕だつて祐は大事な友達だと思つてゐるけど・・・だからつてすぐに由希さんをあきらめるなんて出来ないよ～。』

『じゃあ、どつちがフラれても恨みつこナシにしちゃせつ～。』

『・・・つん。』

『じゃつオレは京浜東北線で帰るからさつ～。じゃあなつ～。』

彼は僕に挑戦状を叩きつけ東京駅で別れた。

そんなこんなで僕はテンションも急落して家に帰った。帰るとすぐ  
にジャイブが僕に詰つ。

「え、もう早いお帰りだな？ いきなり手出してもうフラれたか？ ？ くくく・・・」

『そんなんじやないってば！由希さんの親御さんから電話がきたみたいで慌てて帰っちゃつたんだよ、でもおかしいなあ。由希さんは親とは暮らしてないって聞いてたんだけど・・・』

「由希ちゃんの親・・・・・まさか・・・。」

ジャイブはほそつとそう言つたが今の僕には聞こえなかつた。

そしてその翌日、今までにない波乱が僕を待っていたのだ。

## 10話・絶体絶命（前書き）

ファンタジーランドの後、様子のおかしかつた由希。そんな由希から「もう会えない」というメールがツナに入る。事態を把握できないう。そんな中、ジャイブは由希の身の危険を察知していた。

そして翌日の夜だった。僕の携帯にメールが入った。

「いひいひめんね。もつツナクンとは会えないかも・・・ほんと  
にじめんね。あたしに関わるときっとツナ君危ない目に遭っちゃう  
から。」

突然そんなメールが届いた。僕はその時すぐに思った。・・・まさ  
か・・・まさか！

由希さんが祐とくついた可能性が真っ先に頭に浮かんだ。そんな  
時にただならぬ雰囲気を感じたのかジャイブが近寄ってきた。

「おこ・・・どうした？ ブタ！」

『・・・』

僕は携帯をジャイブに見せた。ジャイブは深刻そうに言った。

「オマエ、多分、祐と由希さんがくついたとかそんな心配して  
るんだろうけど・・・」「つや祐がどうとかいう内容じゃねえと思つ  
ぞ・・・」

まるでジャイブは事態を理解してこいつの口ぶりだ。

『え・・・へじやあいつたいビリ・・・・・・?』

「昨今の様子を考えるよーー強盗から守つたりファンタジーランド

に誘われたり・・・嫌われる要素がねえだろ??

ジャイブにしては珍しく肯定的な意見だ。でも僕のネガティブ思考は止まらない。

『でも現にこりうじてメールがきてるじゃないかあ・・・』

「わからんねえけど裏つ返しに考えてみるよ、こりゃ由希ちゃんからのSOSだともとれるとオレは思ひナビな・・・」

『やうだといいナビ・・・とつあえず祐に電話してみるよ・・・』

僕は恐る恐る祐に電話をしてみる事にした。

「もしもし・・・シナ?」

祐が電話に出ると同時に僕は聞いた。

『祐? ! ねえ、キミと一緒に由希さんからメールこなかつた? ? ?』

電話の向こうの祐はこつもと様子が違うようだつた。

「ああ・・・実は今、由希さんと埠頭についてた。ちょっとマズイ事になつたんだ」

ただならぬ雰囲気を感じて僕は祐に訊ねた。

『それつひりうじと・・・? ? ? またか・・・。今どひにこるの?』

?

「ソナ、いいか？オレにも由希さんにももう関わらない方がいい。もしオレになんかあつたら警察に電話して埠頭にヤバイヤツらがいるって通報してくれ。いいか？オレみたいに・・・・・・」

唐突に電話が切れた。

いつもの祐じやなかつた。真に迫る緊張感に張りつめた声。これは何かあつたに違ひなかつた。

『祐・・・・どうしたんだろ？・・・』

ジャイブは心配そうに僕に聞いた。

「なんだ？ 祐はなんて？」

『今、由希さんといるんだつて・・・それで・・・祐も由希さんと同じ事言つてて・・・。』

ジャイブの表情が変わつた。

「・・・・まさか・・・・おい、祐はどういふつてた？！

ジャイブが僕にすこし劍幕で言つた。

『え？ たしか埠頭つて・・・・・』

「そひと行くぞ！ 祐と由希が危ない！－！

ジャイブはそつとが早いカブに向かつて走り出した。

『な・・・なんで？！』

僕も慌てて後を追いながら訊ねた。

「説明はあとだ！早くカブ動かせ！……！」

こんなすごい剣幕のジャイブは見た事なかつた。そしてこの時、僕の中には大きな闇のような不安が渦巻いていたんだ。まるで……大切な何かが消えていってしまうようなそんな不安。

僕らはカブに飛び乗つて品川埠頭を目指した。時刻は夜中0時00分を回っていたんだ。

走るカブの途中、ジャイブは早口で事情を説明し始めた。

「あいつは一人だつておまえに言つてたけど……。あいつには親がいる。由希の親は……本職のヤクザの組長だ。今、ヤクザ同士の抗争で親ざらいや子ざらいで相手の組の動き封じるとかそういう汚いヤツらが増えてるって聞いた。おそらく由希は祐と二人でいたところをマークされてたんだろう。……急がないと……危ない……。」

『そもそもそんなヤクザがいっぱいいる中に僕ら一人で行つたってどうにもならないじゃないか……。』

もしそれが本当なら警察に任せた方がいいに決まってる。

「バカ！確かな証拠もないのに警察が動くわけねえだろ！オレたちでなんとかしねえとだめなんだ！」

『で・・・・でも・・・・』

決心のつかない僕にジャイブはキレたよつだつた。

「おまえも・・・・惚れた女とダチのために死ぬ覚悟くらい出来るよつになれよ!」

返す言葉がなかつた。猫のジャイブにまで勇気のなさを問われた自分が情けなかつたんだ。

『・・・・・』

「土壇場でビビッて好きな女も友達も見捨てんのかよ・・・・ならいい。オレ一人でもヤツらんとこ行く。こんな猫でもやるとしゃべるんだぜ。」

決心する時なのかもしれない・・・・今が自分を奮い立たせるその時なのかもしれない・・・・

『わかつたよ・・・・・・僕も行く・・・・・・恐いけど・・・・行くー!』

うちから品川埠頭まではすぐだつた。海沿いを歩いていると・・・・うずくまつてゐる一人組がいた。その近くには倒れて氣を失つているであろう黒服の男が二人。

由希さんと祐だつた。祐はもう血と泥だらけだ。由希さんもボロボロだつた。

「ツナクン・・・・・」「ツナ・・・・・なんでこい・・・・・・・・・・・・・・

僕はとにかくここを離れなきゃって思ったんだ。

『キミたちを助けにきたんだよ……。あ、早く逃げよ！今から警察呼ぶから……』

そう言つた時だつた。頭から足の先まで稻妻が走つたよつた衝撃を感じた。

僕はその衝撃に耐えかねて倒れ込んだ。どうやら角材で頭を殴られたしかつた。

僕の後ろでドスの利いた声が聞こえた。

「おう・・・津村のお嬢さん。ナイト様一人に囲まれて逃げよつてか？ そつはいかねえよ。せ、きてもうつぜ！」

痛くて立ち上がれなかつた。頭から流れる汗・・・。手で拭つてみるとそれは血だつた。もうだめだ・・・。

「ちつくしょー！ はなしやがれつ！ くそつ！」

顔も痣と泥だらけの祐は暴れるがもはや抵抗になつていなかつたようだつた。痛さの合間にからうじて顔を上げるとさつき倒れてた黒服と同じ服装の男が2人いて由希さんと祐を車に連れ込もうとしていたんだ。

その時だつた。

「うわっ・・・なんだこの猫は・・・！」

ジャイブが祐を抑える男の顔に飛びついていた。その隙に祐はその男の腕を掴んで腕を廻した。関節がするような音がする・・・。祐は合気道の技でその男の腕を折ったのだった。

「てめえら・・・・手荒いがもつ！」で死んでもらうとするか・・・。

「

僕の予想通りその男は懐からオートマチック拳銃を取り出して銃口を由希さんに向けた。

「そんなことして・・・・ただで済むと思ってるの・・・・? づちの組の人間が黙つてないわよ！――」

青ざめた顔で由希さんが叫んだ。やつぱり組の人間つてのは本當だつたんだ・・・・。しかしながらジャイブはその事を知っていたんだろう。

「斎藤組の若頭の判断でなあ、殺つてもいいってことなんだ。悪く思つなよ・・・。」

拳銃から力ちつて音がする。その瞬間僕の身体は勝手に動いていた。由希さんの前に仁王立ちした僕にパンツといつ乾いた破裂音が聞こえたんだ・・・・・・・・

撃たれたツナ。薄れゆく意識。そこに奇跡が起る……。

僕はゆっくりと倒れていった。仰向けに倒れるその瞬間がすゞくスローモーションでなんだか気持ちよかつた。長い時間をかけて僕は地面に倒れ込んだ。

「ツナ？ ウソだらう……おい……」

「ツナ君……あ……あたしのために……」

かすかに声が聞こえた。きっと由希さんと祐だ。

「くははははー！ テヅから死んだか！ 次は……

恐らくヤクザが喋っていた最中だつたんだろう。さつき僕が聞いた乾いた破裂音が響いた。

今度は誰が撃たれたんだろう。撃たれるのは僕だけでいいのに。

しばらくの沈黙の後に由希さんの声が聞こえた。

「パパ……じうじう……」

「すまんな由希。遅くなつて……」

津村組の組長でもある由希さんのお父さんが来てくれたんだ。撃たれたのはそのヤクザで撃つたのは駆けつけてきた由希さんのお父さんによつた。由希さんははつとして僕のところに駆け寄つてくれた。

「シナ君……『ひづれ』……練の事……よつやく吹っ切れたと思つたの……」

由希さんは涙を流してくれているようだつた。けどその顔もぼやけてあまり見えなかつた。

『……いんだよ……由希さんは幸せになつていかなきや……。僕も……きつと練もそれを望んでいるに違いないんだよ……。』

そしてその後に祐の姿も僕のぼやけた視界に入つてきた。

「ツナ……死ぬなよお……。死ぬんじゃねえよお……」

祐も泣いてくれてる……？でも由希さんと同じく顔がぼやけてもう見えなかつた。

『……こりいろ楽しかつた……。ありがとうね……祐……。由希さんのこと……守つてあげて……。』

だんだん眠くなつてきちゃつた。どうやらお別れが近づいてるんだなつて感じた。僕は最後の力を振り絞つて由希さんの方に向き直つた。

『由希さん……。デジな僕だけ最後に由希さんを守れてよかつた……。僕、由希さんの事がずっと好きでした。だから……。僕には出来なかつた由希さんの幸せ……必ず……。』

どうやら最後まで伝えられなかつた。僕の意識はまるでチヨコレートみたいに溶けていった。

「バカツ！……なんで死んじゃうのよーあたしが……好きになつてから死んじゃうなんて……」

最後に聞こえたその言葉が何より嬉しかつた。意識をなくす直前・。その瞬間だつた。僕のすぐ横から一筋の光が立ち上つたんだ。その光の真ん中にいたのは・・・。

『ジャイブ・・・・』

ジャイブの後ろに人影が映つていく・・・そして見覚えのあるその人は僕の消えかけた意識に語りかけてきた。

「ははは・・・・やつたな、ツナ。おまえは最後の最後で本物の愛情を手に入れたんだ・・。由希を銃弾から守つた姿、なかなかイケてたぜ！」

聞き覚えのある声だけど誰だか思い出せなかつた。

『え・・・・誰？』

「おいおいー友達の声も忘れたか？・・・オレだよー練だよー！」

亡くなつたはずだつた練。そうだ、この声は確かに練だ。

「な・・・・練？！」「つそだろ・・・・・」

彼の声はみんなにも聞こえるようだつた。由希さんも祐も由希さんのお父さんも驚きが隠せない様子だつた。でも僕にはなんとなくわかつてたんだ。ジャイブの口調や口癖は練と似てた。非現実的すぎて確証はなかつたけどほんとただなんとなく。

「オレが死んだ時、ひとつ未練があった。おまえは性格悪いし顔も悪い、デブだしだらしないし・・・そんなおまえの結婚式に出るのがオレの楽しみだつたんだよ。それがこの世への残留思恋つてのか？そういう形で残つてオレの意識はこの猫に憑依させられたつてわけだ。おまえが愛する人間と結ばれた瞬間にオレの意識はちゃんとあの世に行く・・・そういう取り決め付きだけどなー！」

『僕は・・・キミが死んでよかつたと思つた事さえあつたのに・・・どうして？』

練がいなかつたから由希さんと頻繁に会う機会があつたのは事実だつた。僕はきっと無意識的にでも練がいなくなつたのを喜んでいたのかもしれないのに。

「簡単な事だ。オレ、うはダチじやねえか！」

練はそんな僕の意思には驚きもせず笑いながらそう言つたんだ。

『練・・・・・』

そして練は一人にも語りかけ始めた。

「よお、祐ー！おまえの素行は相変わらずだつたなー・・・猫になつてからも見てたぜー！今回の由希獲得合戦は見事におまえの負けだなー！はつはつはーー！」

そう言われた祐は照れたように笑つて言つた。

「・・・ははは・・・たしかにそうかもな・・・」

「でもな、ツナはこの通りダメなヤツだ！由希がいても多分こいつは人間的に変わらねえだろ？」「そん時はおまえが相談に乗つてやつてくれよ！」

「ああ・・・約束するよ」

そう言つと練は由希さんに向き直つた。

「由希～！おまえはほんといい女だ！ツナみたいなブタにはもつたいねえくらいだ！でも・・・おまえが惚れたあいつは間違いじゃねえ・・・。その気持ち大切に・・・幸せになるんだぞ！」

由希さんはまだ練がいる事が信じられない様子だった。

「練・・・ほんとに・・・？？ほんとに練なの・・・？」

「おつとー過去を振り返るのはナシだぜ！オレはもうつらいことないんだ・・・残念だけどな。」

練はちよつと悲しそうに頭を伏せた。

「あなたがいなくなつて・・・死にたかった・・・でも今は・・・」

「

由希さんの言葉を遮つて練は言った。

「わかつてゐる。おまえの心に想つそいつのためにもおまえはバカな事しちゃいけない。」

「でも……そのツナクンも……」

「心配すんなよ……。ツナはオレが必ず救い出してくれるから安心しな……。」

由希さんのお父さんもその様子が信じられないようだった。

「練君……君とこう黙は……私はまるで幻を見てるようだ……。」

そんな由希さんのお父さんに練は言った。

「久し振りだな……おやつさんよ、これでいいだろ？ あいつならあなたの娘さん……おつと幸せになれるはずだぜ……。」

「……君が言つなら間違いないだろ？ 私の娘のために……君にはすまないことをした。そして今度は綱渡君まで……」

「くつーガラじやねーぜ……。安心しなーそのブタはしつかりたたき起しにしてやるよ……。」

そして練は両腕を広げて大声で言つた。

「おまえらのために……一つだけ奇跡を起こしてやる！ 大事なもの、大切にしろよー！」

その瞬間、練の身体がまばゆいばかりに光ると僕の意識はまるで掃除機の中に吸い込まれたような感覚に陥つた。

そして目が覚めると僕は空を見上げていたんだ。

『「ううう…………あれ？ 撃たれたところが……痛くない…………』

殴られた頭も撃たれたお腹の傷も消えてなくなっていた。

「ツナ……君……」

由希さんが僕に抱きついて泣きじゃくる。僕は生き返ったの……？？

「これでもう大丈夫だ……みんな…………じゃあな…………」

練の身体は光と共に消えていった。そして光の中から解き放たれたジャイブはこっちを見て首をかしげていた。

僕は生前の練を好きじゃなかつた。傲慢で女の子にモテモテで僕が好きな女の子は必ず練を好きになつて。好きになれるわけがなかつた。キレイだったのかもしない。でも……

練は死んでも尚、僕を助けてくれた。僕には何もない、ルックスも、知性も運動神経も社会性も！ そんなダメな僕を一度までも命を賭けてまで救つてくれた練。

僕は最高の友達を軽視してしまつていたんだ。誰より僕の事を一生懸命に考えてくれていた一番大切にすべき友達を亡くしてしまったのに……僕はそれによつて転がり込んできた一時の幸せを噛みしめて、友達の不幸を自分の幸にしてしまつたんだ。

僕は由希さんと結ばれた。練が命を張つてくれたおかげで愛情つてものを手に入れる事が出来たんだ。

今僕は由希さんと結婚して幸せな毎日を送つてている。新聞配達じやとてもやつてけないから僕は独立して小さな不動産屋さんの営業マシンをやつてるんだ。今は由希さんとジャイブと暮らしてます。

ジャイブはもう喋らなくなつたけど僕や由希さんと仲良くしてくれる。もしかしたらこいつは元々、練みたいな猫だったのかも知れないな、あははは・・。

でもね、僕が最後に手に入れた大事なものは愛情だけじゃなかつた。永遠に消えない友達との絆。練の思い。

僕は今までずっと世間や周りの人たちに対し劣等感を持つて生きてきていたんだ。僕は一人、僕には何もない。僕は何も出来ない・・。そう思つて生きてきてた。でもそうじやなかつた。

僕にはジャイブ・・・練がいた、祐がいた。そして由希さんがいたんだ。僕は目の前にいた大事な人たちを見て見ぬふりしていたんだ。そんな僕が手に入れたモノ。それは変わらぬ友情、そして愛情だつた。

みなさんに親友はいますか？

みなさんに大事な人はいますか？

いないつて思つてる人、きっとそれは僕と同じだと思う。人は生きてる限り自分を心配し、思つてくれる人が必ずいます。

気付けばその人を無碍に扱っちゃつたり傷つけちゃつたり、生きてく以上そんな事はたくさんあるだらうけど・・・。

僕は僕の大切な人をこれから大切にしていきたいって思います。

孤独を感じた時、死にたくなった時は少しだけ考えてみてください。あなたを思う人が必ずいるつて。そしてその人はあなたがいるだけで救われているんだって。

あわわ・・・なんだか最後は御説教みたいになっちゃつたけどこれがダメダメな僕が大事な人からもらつた大切な物のストーリーです。  
あなたとあなたの大事な人がこれからも幸せでありますように・・・

↓ end ↓

このお話はフィクションです。登場人物は架空の人物です。

許可なく無断転載・転用を禁じます。

## ハピローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？おぞなりなストーリーですが読んでいた  
だいて感じた事、叱咤激励などいただければ嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9207d/>

---

モテない男が手にした物

2010年10月20日14時42分発行